

マンハッタンの人気観光スポット ハイラインでボランティアを体験

ニューヨーク事務所

ニューヨークの都市開発の成功事例の 1 つとされている空中公園のハイラインは、多くの著名人や市民からの寄付で運営資金の 9 割をまかっています。それと同時に多くのボランティアが管理面で参画しています。今回はハイラインの管理団体フレンズオブハイラインにおけるボランティアの活用状況について、自らの体験も踏まえて報告を行います。

だれでも気楽にボランティアができる“ドロップインボランティア”

ハイラインでは、毎週火曜日、登録不要でだれでも参加できるドロップインボランティアを実施しています。受付は午前 8 時から午前 11 時まで、仕事は、ハイラインの園芸員や管理人が行う朝の仕事の手伝いです。参加要件は 14 歳以上であることで、14 歳から 17 歳までは保護者と一緒であることが条件となっています。必要な道具と知識は現地に行けば与えられます。仕事や学校に行くまでの朝の時間で好きなときに来て、好きなときに帰ってくださいというフレキシブルなシステム。登録は 10 時半まで。早い者勝ちで 1 日 10 人までがボランティアに従事することができると案内されています。



受付デスクの様子。通りかかった人も参加 OK。



道路から見たハイライン

ボランティアの仕事～ある日の体験～

このドロップインボランティアを実際に体験してみました。朝 9 時に到着すると指定の場所にボランティア受付デスクが設置されていました。登録用紙に氏名、住所、電話番号、e-mail、どんな種類のボランティアをしたいかを記入します。ガーデニングを希望しましたがその日は、ボランティアのできる作業がないとのことで、代わりに黒のビニール手袋とホウキ、ちりとりを渡されました。公園内の清掃作業で活動時間は自由に決められます。とりあえず 1 時間と記入して、早速公園内を歩くことにしました。ハイライン内は、ごみも少なく美しいのですが、ビルの 3 階相当の高さに位置するため、普通の道路より風が強く吹きます。9 月中旬のニューヨークは秋を感じるような涼しさで、既に落ち葉があちこちに落ち始めています。通路の落ち葉を拾い集めながら歩いて行くこととしました。平日

の朝のハイラインは人がまだ少ないため、ジョギングをしている人が多いのですが、やがて 10 時に近づくと徐々に訪問者が増え始めます。この日は特段ユニフォームなどは与えられませんでした。掃除をしていると、いろいろな人に声をかけられます。トイレはどこか、ハイラインの端まであとどれくらい歩いたら着けるか、チェルシーマーケット（旧ナビスコ工場をおしゃれな市場に改装したハイライン周辺の観光スポット）にはどういったら行けるのかなど。約 1 時間半の間に話かけられたのは、アメリカ人の他に、台湾人、ベラルーシの団体客、中国人、イタリア人という具合であった。

ボランティア受付デスクにいたフレンズオブハイラインで 2 年半勤務しているスタッフに話を聞くと、この日は他に 2 名が作業に従事したということでした。秋になると希望者が減る傾向にありますが、夏場は定員の 10 人満員になる日もあったとのこと。毎週火曜日のドロップインボランティアは、今年から開始された新しい試みで気候のいい夏季の間だけ実施されています。私が参加した 9 月 24 日は今季の最終日だったため、新たなボランティアの機会を探すには、ボランティア登録を勧められました。彼は、主にパークレンジャー担当で、公園内で規則違反者を取り締まるのが主な仕事だといいます。犯罪が少ないことでも有名なハイラインですが、軽微な規則違反は日常的に発生しているとのこと。1 番多いのは犬の散歩、そしてたばこ。違反者を見つけたらすぐに彼が警察に通報し、警察官が来て違反者を公園外に出します。確かに、喫煙が禁止されているはずの公園内で 1 時間半の作業で 5 本以上のたばこの吸殻を拾った。公園へのアクセスポイント（階段とエレベーターの 2 種類）には、公園内の規則表示版が設置されていますがそれでも守れない人も存在しています。一方で、通りかかった若い男性がこの公園に寄付をしたいんだけどここで受け付けてもらえますか？と聞いてくる。寄付の受付は公園内のハイラインショップで行っています。ショップでは、他に、ハイラインメンバーシップへの加入も常時受け付けています。



アクセスポイントにある規則の表示

ニューヨークの縮図

今回、アメリカ生活において初めてボランティアを体験しましたが、澄み渡った秋晴れのハイラインで、作業をするのは思いのほか気持ちのよいものでした。ハイラインはもともと貨物鉄道であったため、通路の幅が狭くなっています。そのため、自然と人の会話がよく聞こえますが、圧倒的に外国語が多く、しかもありとあらゆる言語が聞こえます。それは、まるでニューヨークの縮図のようだと感じます。

また、ハイラインは、歩くたびに新たな発見があります。次々に導入されるアート、季節ごとに姿を変える花や植物、30th ストリート北端から見える第 3 期工事の進ちょくと

ハドソンヤード開発の様子、周辺の高層ビルの工事作業、ゲイ、レズビアン等の尊厳を示すレインボーフラッグを掲げた建物、遠くに見えるエンパイアステートビルディング。それらはいかにもニューヨークらしい光景です。

また、通りかかった人が普通に寄付を申し入れていたのも非常に興味深いことでした。寄付文化はまさにアメリカに根付いているのだと実感しました。

ボランティアの翌日には、コーディネーターから御礼のメールが届きました。あなた方のようなボランティアの助けがあるからこそ、私達はハイラインを訪問客にとって特別なものに保ち続けることができる。ドロップインボランティアは今季は終了したが、来年のボランティア、今後のボランティアの希望や質問があればいつでも連絡をくださいと。

フレンズオブハイラインは、公園の運営を開園当初からニューヨーク市によって委託された初の団体です。ごく普通の青年 2 人が保存運動を始め、常に多くの人々の共感と善意の協力を得ながら、誰も想像できなかった偉業を成し遂げました。この団体が行ってきた多くの人を巻き込む手法から学ぶことは多くあります。

ハイラインはこの他にも多くのボランティアを活用しており、気づいた時には満員御礼で締め切られていることもある狭き門ですが、今後も引き続き、機会を見つけてボランティア活動を続けて行きたいと思います。



ボランティア活動の様子



フレンズオブハイラインのスタッフと

(鷲岡所長補佐 和歌山県派遣)